研究拠点 気仙沼大島漁協文庫の管理と活用

期間：2016年～
［所員］田上　繁　　大川　啓
［客員研究員］重村　力
［協力］三笠友洋（西日本工業大学）

気仙沼大島漁協文庫の永続的な活用体制づくりを目指して

田上　繁

文書班による2017年度の活動は、大島公民館で開催された千葉勝衛氏主宰研究集会への出席と、将来を見据えた漁協文庫の管理と運営についての打ち合わせが主なものである。

まず、2017年11月19日から21日までの日程で、文書班の田上繁、大川啓、建築班の重村力、事務局の窪田涼子の4名が大島に出張し、初日の19日には千葉氏を代表者とする国際常民文化研究機構の共同研究（奨励）「宮城県気仙沼大島における遠洋漁業の歴史的変遷に関する研究―震災救出資料を中心として―」の研究発表会に出席して研究メンバーと意見交換を行った。20日には、漁協文庫の資料保管状況と建築管理状況を調査したのち、大島漁協文庫の会の運営に関する会合を持った。地元のメンバーでは水上忠夫代表、千葉氏、山内繁氏などが出席し、永続的な漁協文庫の管理と活用に関する内容を討議した。検討事項は多岐にわたり、①漁協文庫の会の組織について、②漁協文庫の建物について、③漁協文庫の資料について、④自治体等との関係について、⑤常民研側の体制についての5項目からなっている。

写真１　気仙沼大島漁協文庫

写真２　文庫の内観

とくに、①の組織については議論が沸騰し、決定するまで時間を要したが、最終的には会の代表者に菊田

榮四郎氏を推薦し、メンバーも新たに数名加えることで合意に至った。これまで会を主導されてきた水上氏と千葉氏は参与に就任し、後日、菊田氏からも代表就任の快諾を得たので、菊田新体制のもとで再出発することになった。常民研の方でも運営に向けての対応を整える必要がある。最終日の21日には、漁協文庫の借地の問題について地権者である小野寺義久氏と仙台で面談し、契約内容の打ち合わせを行った。

その後、漁協文庫の会に関連する事務手続き等のため事務局の窪田が2018年3月13日・14日の日程で現地に赴いた。

今年度は、これまで間断的に取り組んできた漁協文庫内の諸資料の整理、分類作業を実施できなかったが、永続的な活用を実現していくためには、最も基本的な資料の整理作業を早急に進めなければならない。今までにも増して地元の方々との連携を強め、東日本大震災で被災した資料の救出事業の一環として建設された漁協文庫について、その保存と活用に向けた体制づくりに力を注ぐべきであろう。

大島漁協文庫建設班2017年度の活動

重村　力

2017年度は、大島漁協文庫の将来への持続的発展のための体制づくりに終始した。菊田新会長をはじめとする島と地域と大学の協力関係の確立への話し合いをすすめた。好意的に土地を提供いただいている小野寺義久氏との契約を確定するための下準備を行い、税務上の問題が起きないようにするため、国・県・市、行政書士関係方面へのヒアリングと説明などを行い、山内繁氏（市文化財保護審議会委員長）と重村とで奔走した。外部資金の獲得が好ましいが、これがなくとも最低限の文庫の会の運用が行われるような財務システムの構築の下準備を行った。これらの基盤のもとで、文庫資料の整理保全、島内外の研究者による活用の仕組み、島と地域および常民研を含めた、支える若い世代の参加と永続化を考える必要がある。そのためのさまざまな働きかけを行った。さらに文庫の会を発展持続させるためには、以下の諸点が重要である。1）本来の目的である文庫資料および島の有形無形のリソースを対象にした研究の発展の仕組みの構築・研究の推進・研究者の発掘、2）島および地域への研究成果や資料の社会公開とその仕組みの持続化、3）小中学生や教師も巻き込んだ子どもたちの関心の啓発などである。

これらを構想し、文庫が地域史誌のアーカイブとして、また島内外と大学・研究者を結ぶローカルなアカデミック拠点として、長期に発展するための準備を行った一年であった。

■活動データ

2017年度の活動

○大島みらい創り協議会・大島漁協文庫の会代表者との打合せ、気仙沼大島漁協文庫の建物管理・資料保管状況の調査　2017年11月19日～21日　大島公民館他　田上繁・大川啓・重村力・窪田涼子

○大島漁協文庫の会代表者との打合せ　2018年1月10日～11日　気仙沼市役所他　重村力

○大島漁協文庫の竣工検査・打合せ　2018年2月5日～6日　気仙沼大島漁協文庫　重村力

○気仙沼大島漁協文庫の建物管理・資料保管状況の調査、大島漁協文庫の会代表者等との打合せ　2018年3月13日～14日　気仙沼大島漁協文庫　窪田涼子